

「ほめに対する応答」の日中対照分析

— 親疎関係に焦点をあてて —

昂燕妮（名古屋大学大学院生）

要 旨

本稿では、日本語と中国語の初対面・友人同士の会話における「ほめに対する応答」に着目し、それが言語社会及び親疎関係にどのように影響されているかを、談話分析の手法を用いて分析した。その結果、日本語の「ほめに対する応答」は、全体的にはほめに対して肯定的な態度を示す傾向にあると同時に、控え目な側面もある。一方、中国語の「ほめに対する応答」には、ほめに積極的に同意を示し、ほめられたことをきっかけに友好的な関係と活発な会話を構築しようとする特徴が見られた。また、日本語の「ほめに対する応答」は、中国語より相手との親疎関係の影響を受ける傾向が示された。具体的には、日中ともに友人同士の会話では応答が「肯定的>回避的>否定的」の順で多く、中国語では大きな親疎の差が見られなかったのに対して、日本語では初対面会話になると「回避的>肯定的>否定的」の順になり、「回避的」な応答が最も多かった。

【キーワード】 ほめに対する応答 日中対照研究 親疎関係 談話分析

1. はじめに

日常のほめる場面において、ほめられる側は様々な反応を示しており、ほめを受け入れるか打ち消すかは、社会文化の影響があるとされている。日中両国において、「謙遜・謙虚」は美德だとされているが、ほめられたら常に不同意を示せばいいわけではない。過度の謙遜は相手に不誠実な印象を与える可能性があり、逆にほめをそのまま受け入れることも自己尊大に思われやすく、ジレンマを抱えている（Pomerantz 1978）。ほめに対してどのように応答を返すかは、微妙な対人関係の調整に関わる複雑な問題であり、相手との親密度の違いによって、応答の仕方が変わると思われる。本研究では、日本語と中国語における初対面・友人同士の会話に出現した「ほめに対する応答」に着目し、それが言語社会及び親疎関係にどのように影響されているかを解明する。

2. 先行研究と本研究の位置づけ

「ほめに対する応答」について、今まで数多くの研究がなされてきたが、その多くはアンケートや談話完成タスク調査によって得られたデータを用いて、特定の言語社

会における応答の選択傾向を数量的に把握するものであり、実際に行われた会話に基づいた分析はまだ少ない。本節では、日本語母語話者（以下、JNS）または中国語母語話者（以下、CNS）の会話における「ほめに対する応答」に着目した主な研究を取り上げ、その成果を整理し、本研究の位置づけを述べる。

JNSとCNSの会話における「ほめに対する応答」に関する対照研究として、梁（2010）と王（2020）がある。梁（2010）は日中のインタビュー番組に見られる「ほめに対する応答」を「肯定」、「否定」、肯定か否定かを明示しない「回避」と、それらが2つ以上続けて現れる「複合」に分類し、各類型の出現頻度を調査した結果、日本語では「回避＞複合＞否定＞肯定」の順、中国語では「回避＞肯定＞複合＞否定」の順で多かった。しかし、梁（2010）が使用しているインタビュー番組の会話は、自然な会話場面とは言いにくい点に限界があると思われる。また、王（2020）は、実際の日中の会話における「ほめに対する応答」を①肯定、②否定、③複合、④ほめ返し、⑤回避他に分けて集計し、日中ともに肯定・否定・回避他が多いと指摘している。王（2020）の分析は、実際の会話に基づく日中対照研究であるところに価値があるが、各類型の応答の出現頻度の把握にとどまっており、談話例に即した具体的な分析は見られない。また、5種のカテゴリー分けは、多様な応答を分類するには、単純すぎる点もあり、日中の「ほめに対する応答」の詳細な特徴と相違については踏み込んでいない。

日中対照研究以外に目を向けると、実際の中国語の会話における「ほめに対する応答」の特徴を扱った研究はまだ見当たらないが、日本語の会話における「ほめに対する応答」に関する研究として、金（2012）、張（2014）、清水（2017）などがある。金（2012）は日韓の親しい大学生の会話を調査し、「ほめに対する応答」を「肯定・否定・回避・複合」の4種類、及びその下位分類に分けて集計した結果、日本語では「複合＞回避＞否定＞肯定」の順、韓国語では「回避＞複合＞肯定＞否定」の順で多かった。また、張（2014）は初対面の会話データを用いて、評価の対象が「聞き手自身」か「聞き手が属する場所」かによって、焦点ずらしの応答（聞き手が応答において、評価の焦点を同じ対象の別側面にずらす現象）の仕方が異なると指摘している。清水（2017）は同等の親しい大学生同士の「ほめに対する応答」を調査した結果、受け入れ型は一定数現れ、現在の若者はほめを打ち消して卑下するよりも、受け入れて相手を尊重する傾向が強いと指摘している。

このように、調査を行った年代と調査対象、対象者の人間関係によって、「ほめに対する応答」の傾向が変わると思われる。先行研究において、日本語に関しては、現在の若者はほめを素直に受け入れる傾向にあることが報告されているが、調査対象は親しい友人同士のみであるため、初対面のような対人配慮に比較的敏感である場面でも同様な傾向が見られるかについてはまだ解明されていない。また、中国語の「ほめに対する応答」は親疎関係にどのように影響されているとも言及されていない。さらに、上述の日中対照研究は年齢、親疎関係などの条件統制を行っていないデータを

使用しており、「ほめに対する応答」の分類も単純であるため、現在の日中の若年層の「ほめに対する応答」の詳細な特徴については明らかにされていない。

上記に基づき、本研究では、20代のJNSとCNSによる、初対面と友人同士の会話における「ほめに対する応答」を対照して分析し、以下の研究課題を解明する。

【課題①】日中の「ほめに対する応答」には、それぞれどのような特徴が見られるのか。

【課題②】日中の「ほめに対する応答」は、相手との親疎関係に影響されるのか。

3. 研究方法

3. 1. 調査概要

本研究のデータは、条件を統制して収集した談話を録音・録画したものである。データの収録時期は2020年8月～2021年3月であり、オンライン会議システムZoomを使用して実施し、JNSとCNSそれぞれ24人の協力を得た。調査では、一人の協力者に2回（友人¹⁾、初対面）、各20分程度の会話に参加してもらい、日本語と中国語の会話を合計48組収録した（表1）。また、完全に自由な会話ではほめが現れにくいいため、会話収録の際、協力者に以下（表2）の話題を中心に話してもらい、会話は自由に展開してよいと指示した。

会話収録後、当日中に協力者を対象に一人ずつフォローアップインタビューを行った。フォローアップインタビューでは、協力者に録画を見せ、「自分がほめた」と「相手にほめられた」と思うところで調査者に声をかけるよう頼み、その時感じたこと・考えたことをできるだけ聞いた。その後、収録したすべての録音・録画データについて、「基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese : BTSJ）2019年改訂版」（宇佐美 2019）に基づいて文字化²⁾を行った。

表1 会話収集の場面設定

条件統制	場面設定		データ数
言語（日本語母語話者、中国語母語話者） 年齢（20代） 上下関係（年齢または学年は2つ以内）	女性同士・初対面 女性同士・友人 男性同士・初対面 男性同士・友人	各6組	日本語24組 中国語24組

表2 会話収集のトピック

場面	話題（日本語）	話題（中国語）
友人（親）	①相手に良いと思っていること、②相手に関して印象に残っていること、③達成感を感じた瞬間、④今最も実現させたい目標	①欣赏对方的地方、②对方让你印象深刻的事情、③有成就感的时刻、④当下最想达成的目标
初対面（疎）	①簡単な自己紹介、②趣味、好きなこと、③頑張っていたこと、④最近あった良いこと・面白いこと	①简单的自我介绍、②兴趣爱好、喜欢做的事、③努力做过的事情、④最近遇到的趣事、开心事

3. 2. 「ほめに対する応答」の認定

本研究では、言語表現だけでなく、実際の会話場面において、当事者が相互の言語行動をどのように捉えているかという心理的プロセスも考慮に入れ、会話参与者双方ともほめであると認識している言語行動だけをほめと見なす。また、金（2012：149）によると、「ほめに対する応答」とは「相手のほめに対して、ほめの受け手が明示的もしくは暗示的に行った言語行動、あるいは非言語行動」である。本研究では、主に「言語行動」を分析の対象にし、扱う範囲を「会話参与者双方ともほめだと認識している言語行動に対する、受け手側の言語的な応答行動」にする。

表3 「ほめに対する応答」の分類

分類		定義と例文
肯定的	同意の発言・態度	ほめに対して同意や賛成の態度を表す。(例 (6))
	控え目な同意	ほめをそのまま受け入れるのではなく、消極的または部分的に同意する。(「まあ、そうかもね。」)
	感謝・喜び	ほめられたことの喜び、あるいは感謝の気持ちを表す。(例 (1)、例 (3))
	ほめ返し	相手のことをほめ返す。(例 (1))
	情報的コメント (肯定的)	ほめられた内容に関する肯定的なコメントや情報を伝える。(例 (6))
	相手も同様	ほめられた内容について、相手も似たような特徴を持っていることを強調する。(「逆もそうだけどね。」「そちらこそ。」)
回避的	シフト	ほかの人・物・ことのおかげにする。(「それは、「相手の名」のおかげでもあるしさ。)
	情報的コメント (中立的)	ほめの内容に関する客観的・中立的な情報説明を行う。(A:「英語の本が読めるってすごいですね。」B:「専門ですから。」)
	冗談・おどけ	冗談や、おどけた態度・表現で応答する。(例 (5))
	ほめ前後の要素に 応答する	ほめに対して明確に態度を示さずに、同じ発話におけるほめ前後の要素に対して応答する。(例 (2))
	ほめの内容の確認	ほめの内容に関する確認や質問。(例 (1)、 「本当ですか?。」)
	話題をそらす	受け手が意図的・非意図的に話題をそらすこと。(A:「[Zoomで初対面の相手の顔を見た瞬間] わー、きれいですね。」B:「今どこですか?。」)
	保留	簡単なあいづちを打つ、または明確な応答をしないことで、自分の態度を保留する。(「嗯ー、怎么说呢。(うんー、なんといえればいいですかね。)」)
	驚き・意外	ほめに対する驚きや意外の気持ちを表す。(「えっ?? [びっくりした様子]」)
	照れ・笑い	照れや恥ずかしさの表明、または笑うだけの反応。(「ははは <笑い>。」)
否定的	情報的コメント (否定的)	ほめられた内容に関する否定的なコメントや情報を伝える。(例 (6))
	比較・低評価	他人と比べることで自分を低評価する。(「[人名] 君には負けますね。」)
	的確さへの疑い	ほめに対する懐疑の態度、あるいは強い疑問を表す。(「よく分からないですけど、よく分からないですね <笑い> これ、分からないわ <笑い>。」)
	控え目な不同意	ほめを打ち消す時、自分の意見を和らげたり、一部を否定したりする。(「高校までは、<笑い> 大学ではそういうのがない。」)
	不同意の発言・態度	ほめに対して否定や不同意の態度を明確に表す。(例 (4))

3. 3. 分析の枠組み

本研究では、清水（2017）の分類を基に、本データで観察できたことを踏まえ、「ほめに対する応答」を上位類型の3類、及びその下位分類の20種に分けた（表3）。本研究の分類の枠組みと清水（2017）との主な違いは、①「情報的コメント・説明」を肯定的／中立的／否定的の3種類に分けたこと、②6つの項目（「相手も同様」「ほめの内容の確認」「驚き・意外」「ほめ前後の要素に応答する」「比較・低評価」「控え目な不同意」）を加えたこと、③各項目の定義を付けたことである。

また、本研究における「肯定的・否定的」はほめられる側が表出した言語要素の性質を指し、「回避的」は肯定か否定か明確に示していない場合を指す。

4. 分析結果

上述の研究手法と分析の枠組みに従って、本節では、データに見られた日中の「ほめに対する応答」の上位類型の出現頻度を表4、下位分類の出現頻度を表5に示す。なお、データ抽出の際に、1発話文³⁾中に種類の異なる「ほめに対する応答」が現れる場合は、それぞれ1つの応答としてカウントした。

表4 「ほめに対する応答」出現頻度（上位類型）

	日本語・親		日本語・疎		中国語・親		中国語・疎	
肯定的	80*▲	46.8%	17*▽	29.8%	76	49.4%	25	41.0%
回避的	65	38.0%	25	43.9%	53	34.4%	24	39.3%
否定的	26	15.2%	15	26.3%	25	16.2%	12	19.7%
合計	171	100%	57	100%	154	100%	61	100%

* $p < .05$ 、▲有意に多い、▽有意に少ない

表4が示しているように、日中ともに、友人同士の会話における「ほめに対する応答」の合計値は、初対面会話を大幅に上回っている。「ほめに対する応答」の多寡は、各場面に現れるほめの回数に直接関わっていることから、友人同士の会話では、初対面会話より相手に関する情報把握がより多く、ほめを行いやすいと言える。

表4の結果について、日中・親疎関係の要因の影響を明らかにするために、 χ^2 検定を行った結果、親疎関係によって日本語の応答の傾向に有意差が見られ（ $\chi^2(2) = 6.195, p < .05$ ）、他の項目には有意差が認められなかった。さらに残差分析を行ったところ、「肯定的」な応答の頻度の差が有意であった（調整済み標準残差：2.2、 $p < .05$ ）。

日本語では、友人同士の会話においては「肯定的」な応答が最も多かったが、初対面になるとその傾向が変わり、「肯定的」な応答が有意に少なく、態度を明示しない「回避的」な応答が多くなった。一方、中国語では、いずれの場面においても、「ほめに対する応答」が「肯定的 > 回避的 > 否定的」の順で多く、親疎関係による差は認め

られなかった。ここから、日本語の「ほめに対する応答」は中国語より親疎関係の影響を受けていると言える。

ここまで、日中の「ほめに対する応答」の全体的な傾向について分析してきた。以下では、下位分類の集計結果（表5）を示し、日中の「ほめに対する応答」の特徴をより具体的に掘り下げていく。表5から観察できたことは以下の3点にまとめられる。

- i. 親疎関係による影響を見ると、日中ともに、友人同士の会話における「④ほめ返し」と「⑪ほめの内容の確認」の使用頻度は初対面より高いのに対して、初対面における「⑩ほめ前後の要素に回答する」の使用頻度は友人同士の会話より高い。
- ii. 他の会話場面に比べると、日本語の友人同士の会話における「③感謝・喜び」と初対面会話における「⑫不同意の発言・態度」、及び中国語の友人同士の会話における「⑨冗談・おどけ」の使用が比較的が多い。
- iii. いずれの場面においても、ほめに対する「①同意の発言・態度」と「情報的コメント」（⑤肯定的+⑧中立的+⑬否定的）の応答が高い頻度で現れている。

表5 「ほめに対する応答」の出現頻度（下位分類）

「ほめに対する応答」の仕方	日本語・親		日本語・疎		中国語・親		中国語・疎	
①同意の発言・態度	14	8.2%	9	15.8%	33	21.4%	11	18.0%
②控え目な同意	1	0.6%	0	0.0%	2	1.3%	0	0.0%
③感謝・喜び	39	22.8%	1	1.8%	5	3.2%	2	3.3%
④ほめ返し	12	7.0%	0	0.0%	14	9.1%	1	1.6%
⑤情報的コメント（肯定的）	9	5.3%	5	8.8%	16	10.4%	7	11.5%
⑥相手も同様	5	2.9%	2	3.5%	6	3.9%	4	6.6%
⑦シフト	2	1.2%	0	0.0%	1	0.6%	1	1.6%
⑧情報的コメント（中立的）	14	8.2%	9	15.8%	10	6.5%	12	19.7%
⑨冗談・おどけ	3	1.8%	0	0.0%	13	8.4%	0	0.0%
⑩ほめ前後の要素に回答する	4	2.3%	9	15.8%	4	2.6%	7	11.5%
⑪ほめの内容の確認	21	12.3%	2	3.5%	14	9.1%	0	0.0%
⑫話題をそらす	7	4.1%	1	1.8%	5	3.2%	2	3.3%
⑬保留	1	0.6%	1	1.8%	0	0.0%	1	1.6%
⑭驚き・意外	3	1.8%	0	0.0%	1	0.6%	0	0.0%
⑮照れ・笑い	10	5.8%	3	5.3%	5	3.2%	1	1.6%
⑯情報的コメント（否定的）	12	7.0%	6	10.5%	13	8.4%	6	9.8%
⑰比較・低評価	1	0.6%	0	0.0%	1	0.6%	0	0.0%
⑱的確さへの疑い	1	0.6%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
⑲控え目な不同意	7	4.1%	1	1.8%	7	4.5%	3	4.9%
⑳不同意の発言・態度	5	2.9%	8	14.0%	4	2.6%	3	4.9%
合計	171	100%	57	100%	154	100%	61	100%

以下では、上記の項目 i → ii → iii の順に、談話例を見ながら1つずつ解説を加えていく。まず、項目 i に関して、例 (1) は初対面会話に比べ、友人同士の会話でより多く見られた「ほめ返し」と「ほめの内容の確認」の例である。

例 (1) <JWF5>⁴⁾ 友人同士の会話における「ほめ返し」と「ほめの内容の確認」

12	J10	<笑い>普通に、ね<笑い>優しいし、誠実だし、すごいアドバイスが的確でいつもうまいし。	←ほめ
13	J09	あー、ありがとう。	←感謝・喜び
14	J10	言ってほしいことをちゃんとしてくれるから、すごい頼りになる。	←ほめ
15	J09	あー、でも「J10の名」ちゃん逆にさあ、めっちゃき、き、聞くのがうまいなと思う、なんか人が話している時にさ、あんまり割り込んでこないじゃん。	←ほめ返し
16	J10	そう??<笑い>。	←ほめの内容の確認
17	J09	なんかさ、割と“うん、うん”って感じで聞いてくれるなと思った。	
18	J10	<笑い>多分、聞きやすいと思う。	

例 (1) の12行目と14行目で、J10はJ09を2回ほめており、受け手のJ09が15行目でほめ返している。15行目の「ほめ返し」が産出されたきっかけは、14行目のほめにあると考えられる。つまり、J10の「言ってほしいことをちゃんとしてくれる」というほめがきっかけで、ほめられたJ09は「聞くのがうまい、話に割り込んでこない」とほめ返していると解釈できる。本研究における友人同士の会話では、このような「ほめられた内容に関して相手も似たような特質を持っているため、その点についてほめ返す」といったケースが多く観察され、会話参与者双方が相互に認め合うことで、友好的なコミュニケーションと対人関係を構築しようとしていると言える。

なお、相手をほめるには、事実・根拠や相手に関する理解などが必要であり、ただほめればいいわけではない。初対面における「ほめ返し」が少ないのは、相手に対する情報把握が非常に限られており、ほめの材料の欠如と関連があると思われる。

さらに、例 (1) では、J09の「ほめ返し」(15行目) に対して、J10が「そう??」(16行目) と「ほめの内容の確認」の応答をしている。このような友人間の「ほめの内容の確認」は、「受容態度の曖昧化による謙遜」と「確認や質問」の二通りの解釈ができると考えられる。しかし、初対面会話となると、「ほめの内容の確認」は、ほめの内容の信頼性に対する疑問になりやすく、順調な会話展開を妨げる可能性がある。本データで、友人同士の会話に比べ、初対面会話における「ほめの内容の確認」の使用が少なかったのは、それが一因であると考えられる。

次に、初対面会話で比較的に多く現れた「ほめ前後の要素に应答する」の例を見る。
例(2) <JWN3>初対面会話における「ほめ前後の要素に应答する」

14	J07	すごいですね、めっちゃ、へえー、どれくらいやってたんですか？日本語学校の先生は。	←ほめ
15	J05	半年で(うん)、一応その去年の10月くらいから2020年2月くらいまで、半期やってて(あー)、本当は今年「国名」に行くつもりだったんで、やめますというふうでやめちゃったんですけど。	←ほめ前後の要素に应答する
16	J07	そうなんです、いや、なんか、すごいと思います、なんか、私は若干授業でTAみたいな。	←ほめ
17	J05	あー、TA、名前に書いてるんですね。	←ほめ前後の要素に应答する
18	J07	そうなんです、これ、あれなんです、結構いまZOOMでTAしてて、教授にTA、なんか“学生かTAかわからんからTAにしとけ”みたいなめっちゃ言われて、	
19	J05	<あーなるほど>{<}	
20	J07	<常にTAって表記>{>}されて(うんうん)、そうなんです、これでやってると、なんか本当日本人相手でも、なんか、分かってくれてるかなってめっちゃ思うときあるんで、(あー)それを外国人相手に日本語を教えるってめっちゃ大変だろうなって思います<笑い>同じ日本人の学生でもね、なんかめっちゃ不安になる時もあるので、(うんうんうん)すごいですね。	←ほめ
21	J05	オンライン授業だと、特に(ねえ)、なんか、ちょっと反応遅かったりしませんか？大丈夫かなみたいな。	←ほめ前後の要素に应答する
22	J07	そうですね。	

例(2)の14行目で、J07はJ05を「すごいですね、めっちゃ」とほめた後、「どれくらいやってたんですか？」と質問している。それに対してJ05は、ほめの部分に触れずに、「去年の10月くらいから2020年2月くらいまで」と、質問の部分のみに明確に答えている。その後、J07は16行目で再度「すごいと思います」とほめてから、自分がTAを担当した経験を開示して、20行目でもう一回J05をほめている。受け手のJ05の应答を見ると、17行目では、ほめの部分に対して態度を明確に示さずに、相手のTAの話に対して「TA、名前に書いてるね」と应答している。21行目でも、20行目の「すごいですね」というほめに対して態度の明示を回避し、相手の情報開示に対して、「オンライン授業だと反応遅かったりしませんか」と同意を求めている。

本研究では、このような「ほめられる側がほめに対して明確に態度を示さずに、同じ発話におけるほめ前後の要素に対して応答する」場合を、「ほめ前後の要素に応答する」とし、「回避的」な応答として分類する。金（2012）によると、ほめに対する「回避的」な応答は、「受け入れによる自己尊大」と「打ち消しによる好意拒絶」というジレンマを解消する効果がある。例（2）では、ほめられる側が初対面の相手に応じて話を展開しながら、「回避的」な応答をとることでジレンマに対処している様子が窺え、対人配慮と会話運営上の工夫であると言える。

次に、項目 ii について見ていく。まず、例（3）は JNS 友人同士の「ほめに対する応答」で最も多く見られた「感謝・喜び」の応答の用例である。

例（3）<JMF3> JNS 友人同士の会話における「感謝・喜び」

32	J18	あっ、もう1つ相手に関していいと思っていること、えーと、プレ、デザインがすばらしい。	←ほめ
33	J17	あっ、ありがとうございます。	←感謝・喜び
34	J18	デザインがすばらしいというのは、あの、そうですね、韓国、韓国語のサークルをやった時に、PPTを作っていただいて、もう今でも、いろんな人に共有したいくらいすばらしい。	←ほめ
35	J17	ありがとうございます。	←感謝・喜び
36	J18	作ってただいて、今でも財産になってます、ちゃんと保存してます、パソコンに。	←ほめ
37	J17	そうなんですか、ありがとうございます、<僕も>{<}【。	←感謝・喜び

例（3）は友人同士の会話である。ほめられる側の J17 は 3 つのほめ（32 行目、34 行目、36 行目）に対して、相手は友人でありながらも、「デス・マス」調で、丁寧に「感謝」の言葉を言っている。それとともに、ほめる側の J18 の発話にも普通体から丁寧体への「スピーチレベル・シフト」（三牧 2013）が見られた。具体的には、32 行目では普通体で話しているが、33 行目の「デス・マス」調の感謝の言葉を受けた後、34 行目では「そうですね」と「作ってただいて」といった丁寧な表現が使われ、発話の一部が丁寧体になっている。さらに、その後の 36 行目では、J18 が「作ってただいて、今でも財産になってます、ちゃんと保存してます、パソコンに」とほめを行っており、発話が完全に丁寧体にシフトされている。

本データでは、JNS の友人同士の会話において、「感謝・喜び」の応答が最も多用されている。39 例のうち、19 例が「デス・マス」調で表現され、相手は友人でありながらも、ほめてくれたことの好意を丁寧に受け取り、感謝を返す特徴が見られた。

それに対して、CNS の友人同士の会話では「感謝・喜び」は 5 例しか見られなかった。その理由として、中国語において、友人にわざわざ感謝を述べることは、他人行

儀だと思われる可能性があること（黄 2015）などが考えられる。

次に、JNS 初対面会話に比較的に多く見られた「不同意の発言・態度」の例を見る。

例（4）＜JMN1＞JNS 初対面会話における「不同意の発言・態度」

30	J13	ってことは、「J16の姓」さん、もしかして 【。	
31	J16	】 僕まだ博士、あと1、2年あるかなと思って。	
32	J13	すごいですね、それは普通にすごいです、尊敬します。	←ほめ
33	J16	いいえいいえいいえ。	←不同意の発言・ 態度
34	J13	僕、途中も<やっていけないような>{<} 【。	←ほめ
35	J16	】 <確かに、それは>{>}、いやいやいや、分野による と思いますけど。	←不同意の発言・ 態度
36	J13	いやいやいや、すごい、すごいです、尊敬します、普通に。	←ほめ
37	J16	いやいやいや、工学部も多いですもんね、博士にいく人 達も。	←不同意の発言・ 態度

例（4）において、J13はJ16に対して、博士で学んでいることを複数回ほめているが、J16は「いいえいいえいいえ」（33行目）「いやいやいや」（35行目、37行目）と、繰り返して不同意を示している。

ほめに対して不同意を示すことで、謙遜の気持ちを表現することができる。本データにおけるJNSの初対面会話で、ほめに対する「不同意の発言・態度」の応答が比較的に高い頻度で現れたのは、初対面の相手に「謙虚な人」というイメージを与えたいという動機付けがあると考えられる。このことはまた、JNS 初対面会話における「ほめに対する応答」の控え目な側面を反映していると言える。

続いて、例（5）を見ながら、CNS 友人同士の「ほめに対する応答」の特徴の1つである「冗談・おどけ」の多用について解説する。

例（5）＜CWF1＞CNS 友人同士の会話における「冗談・おどけ」

17	C01	就是，然后，长得好看。（それから、顔がいい。）	←ほめ
18	C02	<一起大笑> 这么突然。（<一緒に大笑い> 何よ、突然。）	←冗談・おどけ
19	C01	这是重点这是重点。（これ大事だよ。）	
20	C02	这是内心话么？。（本気で言ってるの？。）	
21	C01	这是内心话啊，我妈就夸你，“你们宿舍这姑娘是谁啊，长得这么洋气”。（本気本気、母も“あんたと一緒に住んでいる子は誰？おしゃれだね”とほめていたよ。）	←ほめ
22	C02	南方的一匹狼。（南のオオカミ。）	←冗談・おどけ
23	C01	<一起大笑> 南方的一匹狼。（<一緒に大笑い> 南のオオカミ。）	

例 (5) では、C01 が17行目でC02の外見をほめてから、21行目で母親のコメントを引用し、評価しているのは自分だけではないと、ほめの根拠を追加している。受け手のC02は18行目で軽い文句を言って相手をからかい、再度ほめられたあと、冗談として自分のことを「南のオオカミ」(22行目)に例えている。Brown & Levinson (1987)のポライトネス理論によると、友人同士の冗談やからかいは、共有の背景知識や価値観の前提に基づく行動であり、親密な関係作りに貢献することができる。実際、23行目では、C01がC02の冗談を繰り返して、一緒に笑って会話を楽しむ様子が窺われる。

本データでは、CNS 友人同士の会話において、ほめに対する「冗談・おどけ」の応答が比較的に高い頻度で現れている。会話参与者双方は、親しいからこそ言える「冗談・おどけ」で、会話を活発に展開させていると言える。

それに対して、JNSの会話においては「冗談・おどけ」があまり見られなかった。このことは、例(3)の分析で述べた「相手からのほめを丁寧に受け取って応答を返す」といった日本語の「ほめに対する応答」の特徴を反映していると考えられる。

最後に、項目iiiにおける「同意の発言・態度」と「情報的コメント」の応答について見る。表5が示しているように、いずれの場面においても、「同意の発言・態度」の応答が高い頻度で現れている。特に中国語では、人間関係に関わらず「同意の発言・態度」が最も多用されており、CNSはJNSよりほめを率直に受け入れていると言える。

また、本データでは、どの会話場面においても、「情報的コメント(肯定的・中立的・否定的)」の応答が多く見られた。さらに、日中ともに、友人同士の会話より初対面会話において、「情報的コメント」の使用頻度がやや高いことが見られた。友人間では、すでに相互に関する情報がある程度把握しているため、ほめられる側が新たな情報コメントをしなくても会話が弾む場合があると思われる。それに対して、初対面会話における情報コメントの提示はさらなる会話の進行につながり、ゆえに「情報的コメント」が友人同士の会話より多く使われていると考えられる。

例(6) <CWN2> 「同意の発言・態度」と「情報的コメント」の応答

57	C04	就是每天会尝试做不同的饭嘛, 然后炒菜啥的, 就感觉自己的厨艺,, (毎日いろんな料理を作ったり、野菜を炒めたりして、腕前が,,)	
58	C02	<蹭蹭蹭往上升>{<}。(<どんどん上がった>{<}。)	
59	C04	<提升了很多>{>} , 对对对。(<すごく上がった>{>}、そうそうそう。)	
60	C02	太厉害了, 哇—我觉得这个好有成就感。(すごいですね、わー、すごく達成感が得られると思う。)	←ほめ

61	C04	<笑>是，就是感觉你自己吃自己做的饭就可能，虽然说，嗯，就是大家都比较捧场嘛，就是说“啊，好好吃”，就特别有成就感。（<笑い>そう、自分が作った料理を食べるのは本当、うん、みんなが“ああ、おいしいね”と評価してくれるから、すごく達成感あるよね。）	←同意の発言・態度 ←情報的コメント（肯定的）
62	C02	对啊，肯定很有成就感啊，真的，哇，这个很厉害真的。（そう、きっと達成感あるよ、本当、わー、すごくすごいと思う、本当。）	←ほめ
63	C04	<笑>但是我也就学了一两道菜，就是可乐鸡翅<笑>，土豆焖鸡。（<笑い>でも、習ったのは1、2品だけ<笑い>、手羽先のコーラ煮と、鶏肉のじゃがいも煮。）	←情報的コメント（否定的）

例（6）は初対面のCNS女性同士の会話である。C04は57行目で自分の料理の腕前をポジティブに開示しており、聞き手のC02は60行目で、共感的にほめを行っている。続きの61行目において、C04はほめに対して「是（そう）」と「同意の発言・態度」を示してから、「自分が作った料理を食べるのは本当…すごく達成感あるよね」と、肯定的な情報コメントを述べている。その新情報を受けたC02は、62行目で「きっと達成感あるよ…すごくすごい…」と、共感を示しながら、再びほめを行っている。その後、C04は63行目で、「でも、習ったのは1、2品だけ」と、否定的な新情報を開示し、会話をさらに展開させている。

このように、ほめられる側からの「情報的コメント」は、さらなる会話展開につながり、会話進行のきっかけになっている。本データでは、いずれの場面においても、こうした「情報的コメント」の応答が高い頻度で現れている。ほめられる側が「ほめに対する応答」で積極的に新情報を開示し、会話をさらに展開させようとしていることの1つの表れであると言える。

5. 考察と今後の課題

本研究では、日中の若年層の「ほめに対する応答」に着目し、社会文化・親疎関係による影響を分析してきた。本研究で観察された主なことは以下のとおりである。

【課題④】に関しては、日中の「ほめに対する応答」の特徴に違いが見られた。日本語の友人同士の会話においては、「肯定的」な応答が最も多かったが、ほめに「同意して受け入れる」よりも「丁寧に敬礼を言う」傾向がある。また、日本語の初対面会話では、態度を明示しない「回避的」な応答が最も多く使われている一方で、下位分類を見ると「同意の発言・態度」も一定数で現れている。これらのことから、日本語の「ほめに対する応答」の特徴は、「全体的にはほめに対して肯定的な態度を示す傾向にあると同時に、控え目な側面もある」と言える。

それに対して、中国語では、親疎関係に関わらず「肯定的」な応答が最も多かった。友人同士の会話においては、ほめを率直に受け入れる「同意の発言・態度」が最も多く、「肯定的な情動的コメント」「冗談・おどけ」「ほめ返し」のような会話を活発に展開させる応答も比較的によく多用されている。また、初対面会話においてもほめを受け入れたり、自ら情報コメントを提示したりして会話を展開させる傾向がある。ここから、中国語の「ほめに対する応答」の特徴は「ほめに積極的に同意を示し、ほめられたことをきっかけに友好的な関係と活発な会話を構築しようとする」とまとめられる。

【課題②】に関しては、日本語の「ほめに対する応答」が、中国語より相手との親疎関係の影響を受ける傾向が示された。日中ともに友人同士の会話では、「ほめに対する応答」が「肯定的>回避的>否定的」の順で多かった。しかし、中国語では初対面会話においてもその傾向に大きな変化が見られなかった一方、日本語では初対面会話になると「肯定的」な応答が少なくなり、「回避的」な応答が最も多かった。また、個別の応答の使用を見ると、日中ともに、「ほめ返し」(友人同士の会話に多い)、「ほめ内容の確認」(友人同士の会話に多い)、「ほめ前後の要素に応答する」(初対面会話に多い)の使用頻度に親疎関係による差が見られた。ほめの材料の多寡、及び対人配慮と場面の特徴などの要因が関わっていると考えられる。

先行研究の結果と比較してみると、清水(2017)の結果と同じく、本研究でもJNSの友人同士の会話においては、ほめを打ち消して卑下するよりもほめに同意・感謝を示す特徴が示された。一方で、金(2012)とは異なる傾向が示され、これは時代的变化の影響だと推測される(金(2012)のデータ収集時期は1999年である)。さらに、梁(2010)と王(2020)では解明されていなかった日本語と中国語の「ほめに対する応答」の特徴を具体的に分析し、それに加えて、親疎関係の影響も明らかにした。

最後に、本研究から得られた日本語教育への示唆について述べる。8冊の日本語教科書におけるほめと応答を調査した犬飼(2018)は、教材で扱われている「ほめに対する応答」の種類が単一であり、否定的応答しか扱っていない教科書も見られ、さらに人間関係による影響にも言及しておらず、教師の補足と指導が必要であると指摘している。本研究の成果は、日本語教育現場における補足と指導の参考になると思われる。本研究におけるJNSの「ほめに対する応答」のうち、出現頻度が比較的に高い「同意・感謝や喜び・不同意・情動的コメント・ほめ返し」などを、場面によって1つか複数か用いることを、「ほめに対する応答」のサンプルとして提示することが可能だと思われる。また、本研究の結果に基づいて言えるのは、日本語学習者に現在の日本語の「ほめに対する応答」の特徴を理解させ、ほめてくれた相手からの好意を素直に受け止めたうえで反応する能力と、ほめの内容に関する情報を開示して会話をさらに展開させるなどの能力を身につけることが重要だということである。

紙幅の制限で、本稿では、「ほめに対する応答」の組み合わせを論じることができ

なかった。本データから、「ほめに対する応答」の組み合わせは、「発話レベル」（先行研究における「複合」の応答）と「談話レベル」の2つのレベルがあることが見られた。

「発話レベル」の組み合わせは、1発話文中に種類の異なる応答が現れる場合を指す。先行研究では、こうした応答を「複合」とし、「肯定・否定・回避」とともに、「ほめに対する応答」の分類の1つのカテゴリーとして捉えている。しかし、同じく「複合」の応答でも、その内容を見ると数多くの「複合」の仕方があるが、先行研究では、そのすべてを「複合」として分類しており、詳細な特徴については扱われていない。

それに加えて、「発話レベル」だけでは、「ほめに対する応答」の特徴を捉えきれない。たとえば、例（6）の一連のやりとりにおいて、ほめる側のほめの焦点が変わっていないが、受け手の応答には、「肯定的」なもの（61行目）と「否定的」なもの（63行目）が見られた。談話全体から見ると、ほめられる側は自分と相手の言語行動を総合的に捉え、対人関係を調整しながら多様な応答をとっていると考えられる。しかし、このような複数の発話にまたがる「談話レベル」の「ほめに対する応答」の組み合わせについては、まだ研究されていない。今後は、上述の2つのレベルの「ほめに対する応答」の組み合わせの類型と特徴を明らかにしたい。

注

- 1) 友人同士の会話調査協力者の募集は、CNS・JNSともに「親友ペアでの参加」という同じ条件のもとで行った。フェイスシートの記述から見て、協力者達は「お互いが親友である」という認識を持ち、「親しい」から「とても親しい」程度の付き合いだと考えられる。
- 2) 本稿で使用した主な記号凡例：<>{<} 重ねられた発話 <>{>} 重ねた発話
。発話文の終了 。。未完結文 ? 疑問文 ?? 半疑問文 “ ” 引用
<> 笑いなどの説明 () 短いあいづち [] 文脈情報 「 」 個人情報
【 】 前の発話 (【】が完結する前に、次の話者の発話(【】)が始まった
- 3) 「発話文」の判断基準は、「基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese：BTSJ）2019年改訂版」（宇佐美 2019）に従い、基本的に一人の話者による文を成していると捉えられるものを「1発話文」とする。一語文や中途終了文の場合は、話者交替や間などを考慮した上で「1発話文」であるかどうかを判断する。
- 4) 談話表記の規則：J（Japanese）日本人、C（Chinese）中国人、W（Woman）女性、M（Man）男性、N（New friend）初対面、F（Friend）友人

参考文献

犬飼英男（2018）「日本語教科書におけるほめと返答」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』19、43-52

- 宇佐美まゆみ (2019) 「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese : BTSJ) 2019 年改訂版」
- 王欣 (2020) 『日本語と中国語の褒めの言語行動の対照研究—談話展開の観点から—』九州大学博士論文
- 金庚芬 (2012) 『日本語と韓国語の「ほめ」に関する対照研究』 ひつじ書房
- 黄明淑 (2015) 「「誘い」談話の「承諾」場面の終結部における中日言語行動の比較—負担度が異なる 2 場面から—」 『言語文化と日本語教育』 48/49、22-31
- 清水由希 (2017) 「ほめ言葉に対する返答について」 『国文目白』 56、31-47
- 張承姫 (2014) 「相互行為としてのほめとほめの応答—聞き手の焦点ずらしの応答に注目して—」 『社会言語科学』 17 (1)、98-113
- 三牧陽子 (2013) 『ポライトネスの談話分析—初対面のコミュニケーションの姿と仕組み—』 くろしお出版
- 梁興宇 (2010) 「言語行為「ほめ」に対する返答の社会言語的考察—日本語話者と中国語話者の例—」 『国際文化研究』 16、83-96
- Brown, P. & Levinson, S.C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.
- Pomerantz, A. (1978). Compliments responses: Notes on the co-operation of multiple constraints. In J. Schenkein (Ed.), *Studies in the organization of conversational interaction* (pp.115-132). New York: Academic Press.

本論文を執筆するにあたり、ご指導いただきました名古屋大学の俵山雄司先生、多くの貴重なコメントを下さいました査読の先生方、データ収集にご協力していただきました方々に、心より感謝申し上げます。